

台湾大学留学プログラム感想文 (2019/3/9-17)

初めて訪れた台湾での短期留学は、1週間と短くも日本との違いにあふれた刺激的なものとなりました。共通語が英語でしたが、英語と触れる機会が普段あまりないため、不安を抱えながらのスタートでしたが、台湾大学の留学生や先生方に助けていただきながら、大変充実した貴重な時間を過ごすことができました。

台湾大学病院で精神科や内科などの病棟に入って現場を見せていただき、実習中の台湾大学の看護学生と病棟看護師さんに付いて回らせていただきました。私たちの実習先の病院と異なる点がいくつかあり、驚くこともありました。全体を通して私が最も印象的だったことは、院内に病院ボランティアがいらっしやり、医療スタッフと連携して活動されていたことでした。私が話した50代の男性は、以前に病院で療養されていて、社会貢献のためにこの活動を始めたとおっしゃっていました。彼らは、患者さんのベッドサイドにお茶を持って行って話をする人、入浴介助をする人、お別れ会や誕生日会を開くための準備や事務などを行う人など、いくつかのチームに分かれて活動していました。医療スタッフと患者やその家族、ボランティアの方々など、院内には多くの人がいて活気があり、とても新鮮に感じられました。

5日目には山や海に囲まれた土地にある金山病院に行き、地域で活躍する訪問看護師さんに同行して2軒のご自宅に伺うことができました。私が在宅実習のときに同行した看護師は、ご自身で車を運転し患者さん宅へ訪問していましたが、台湾では病院の車を運転するドライバーもチームの一員として働いていらっしやいました。また、慣れ親しんだ自宅で最期を迎えるというのがしきたりで、患者さんが亡くなった後、自宅でテントを出して行うパーティーでは、看護師とドライバーが家族と一緒に飾りつけなどをするそうです。伺った先の患者さんやご家族は、訪問看護師やドライバーをまるで家族のように受け入れている様子で、自宅のソファで手作りのお菓子を食べて和気あいあいとお話されているのを見て驚くとともに、患者・家族とスタッフの間に大きな絆を感じました。

1週間という短い期間でしたが、病院や大学内、観光スポットなど様々な場所に台湾大学の学生の皆さんが案内してくださいました。台湾では中国語が公用語ですが、皆さん日常会話だけでなく医療英語も知っており、英語を使うことに慣れていました。そのため、英語力の差でコミュニケーションがスムーズにとれないことにもどかしさを感じましたが、世界の人とつながるために英語を話せるようになりたいという気持ちが一層強くなりました。また、同じ看護師として働くために勉強している台湾の学生と出会い、国は違っても同じ世界の中で自分も何かに挑戦し、成し遂げたいと思うようになりました。

最後になりましたが、今回短期留学に参加するうえでお世話になった皆様方に心より感謝申し上げます。